

ひきちかみぎり

引地上切A遺跡

所在地 豊田市下山田代町引地上切・下引地
地内

(北緯 35 度 1 分 05 秒

東経 137 度 18 分 30 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成
事業

調査期間 平成 26 年 8 月～平成 26 年 10 月

調査面積 2,900 m²

担当者 成瀬友弘・鐸木厚太

調査経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。

立地と環境 本遺跡は、保久川の支流、上沢尻川右岸の谷間に所在し、北向きに広く開口する谷の緩斜面に立地している。同じ上沢尻川の右岸沿いには引地上切 B 遺跡、引地上切 C 遺跡が近接し、左岸にはオンボ A 遺跡、オンボ B 遺跡、オンボ C 遺跡が近在している。

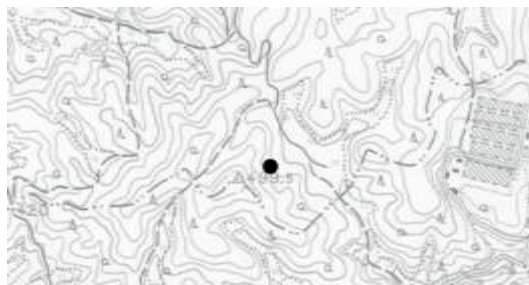
調査の概要 調査の結果、本遺跡は出土遺物から弥生時代、古代、中世、近世及び近代にかけての 4 時期が認められる。主な遺構としては、古代の溝、中世の掘立柱建物、井戸等を検出している。遺構の多くは緩斜面に立地していたが、小規模な平坦面がいくつか確認でき、その上に構築されている場合もあった。

本遺跡の層序は、表土直上のオリーブ褐色シルト（遺物包含層）、黒褐色土、黄褐色シルト（遺構面、ベース土）に大別できる。表土からオリーブ褐色シルトまでの厚さは全体的に 50 cm 程度で、包含層からは古代～中世の遺物が出土している。また、黒褐色土については、調査区中央を南北に縦断する自然流路内に堆積した土である。本調査では、範囲確認調査の結果を踏まえて 2 面の検出面を設定した。第 1 検出面はベース土及び自然流路内の黒褐色土直上、第 2 検出面は自然流路内の黒褐色土を除去した状態である。以下、各面における調査概要を報告する。

1 面の調査 1 面では古代、中世、近世及び近代の遺構を検出している。

古代は、南西部の斜面において溝 2 条を検出している。012SD は斜面を切り出すかたちで平坦面が造られ、埋土から焼土のブロックや多くの灰釉陶器が出土している。同時期の遺物が出土している 010SD と合わせて堅穴建物関連の可能性が考えられる遺構群である。

中世の遺構は調査区全域に広がり、掘立柱建物 1 棟、井戸 1 基、方形土坑 3 基の他にピットなどが多数確認された。掘立柱建物 (046SB) は南東部の斜面に立地し、柱間は 2 間×3 間であった。付近では同時期のピットや土坑を多数検出しているが、建物や柵列としてはまとまらなかった。井戸 (116SE) は北東部で検出している。構造は素掘りで、内部に砂を沈殿させるための礫が敷き詰められ、排水機能をもつと考えられる 117SD が斜面下手の北に接続している。方形土坑 (079SK、096SK、109SK) は東部の平坦面で検出している。特に、096SK、109SK の埋土からは焼土のブロックを確認



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)

している。これらの遺構からは、中世前期の山茶碗やこれに共伴する遺物が出土し、同時期に複数の遺構が遺跡内で構築されたと考えられる。

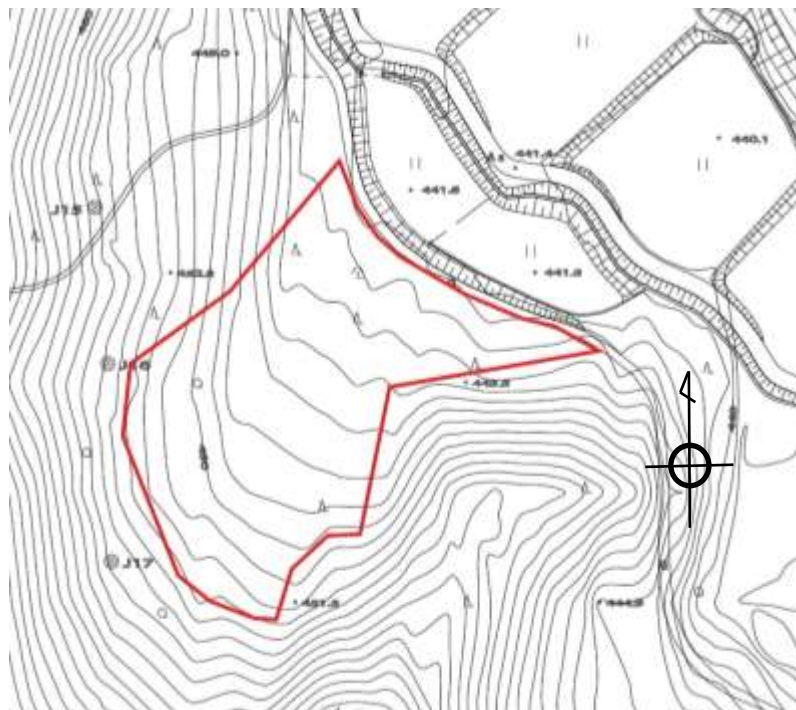
近世から近代の遺構としては、炭焼窯を6基検出している。調査区南東部に所在する057SYは、058SYの上から再構築を行った炭焼窯で、埋土から近世の陶胎染付が出土している。

2面の調査 2面では自然流路、中世の遺構を検出している。

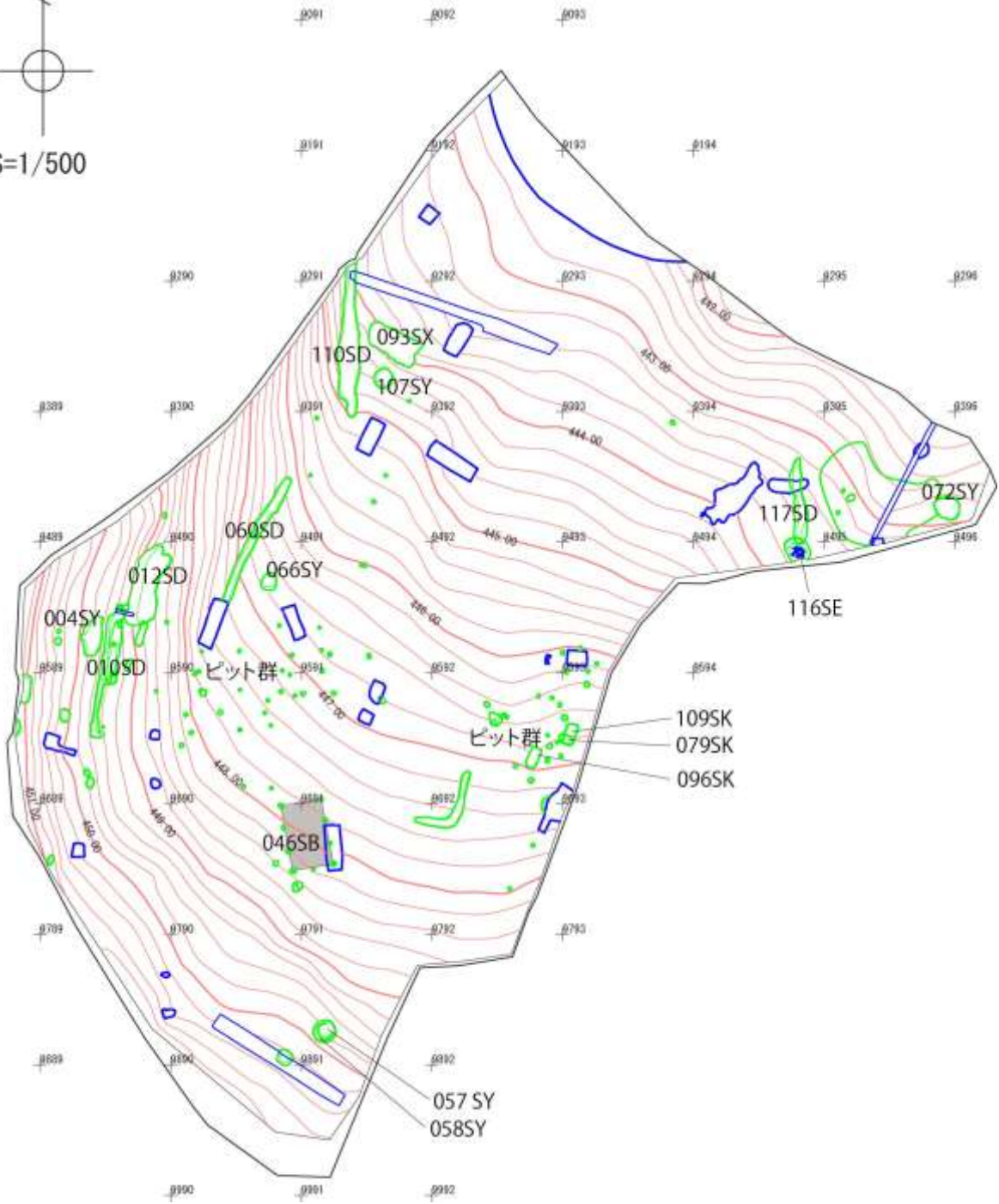
自然流路は123NRと124NRの2条がある。123NRは、調査区の中央部で南から北にかけて検出した。幅は、上流で広く、下るにつれて狭くなる。流路は大きく上層と下層に分かれ、下層で古代の灰釉陶器、上層で中世前期の山茶碗から中世中期の古瀬戸製品を多量に包含していた。最上層からは、弥生時代の石鏃1点を確認した。特に、注目されるのは、中世の山茶碗や古瀬戸に共伴して青磁や刀子、鞆の羽口が出土している点である。また、墨書された灰釉陶器や山茶碗の確認ができ、当地における活動の一端を示すものと考えられる。124NRは北部で検出しているが、遺物は出土していない。遺構内部には滞水していた痕跡が認められることから、接続する123NRや遺跡周辺を流れる谷の氾濫原であったといえよう。

中世の遺構は、井戸2基及びピット群を検出した。これらは、流路の掘削後に検出した遺構である。125SEでは、薄い板材を井戸枠として使用していることを確認した。

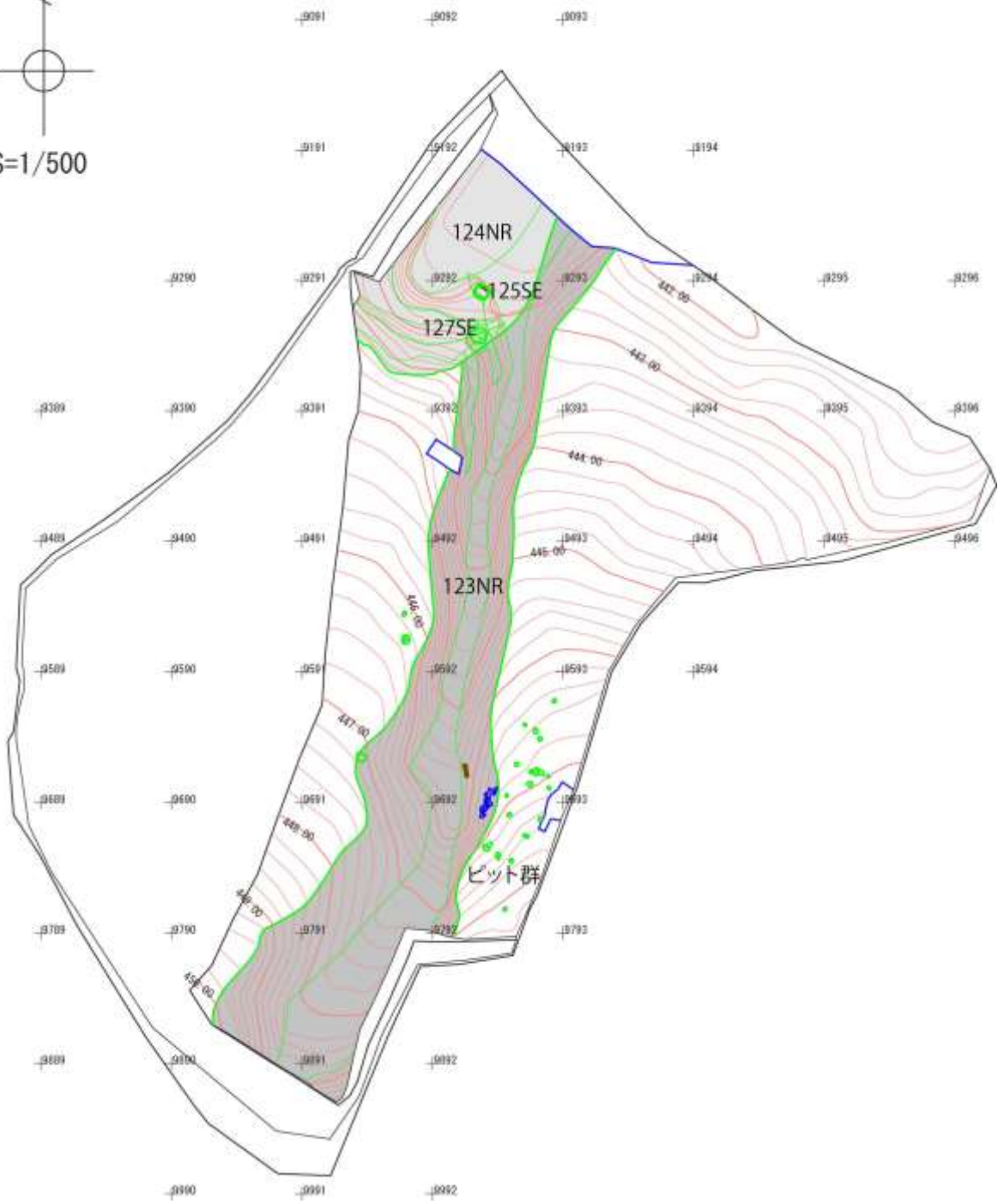
ま と め 調査では、中世の遺構・遺物を多く確認した。当該地域での活動を示す痕跡としては、掘立柱建物や井戸等の遺構並びに流路から出土した多種多様な遺物がある。これらの時期は概ね中世前半にまとめ、一連の活動の中で構築されたものとするのが妥当であろう。今後は近在する遺跡と比較して、中世山間部の景観復元を行い、その中で引地上切A遺跡が果たした役割を明らかにしていく必要がある。 (鐸木厚太)



調査区図 (1 : 1,000)



引地上切A遺跡 1面遺構平面図 (1 : 500)



引地上切A遺跡 2面遺構平面図 (1 : 500)



1面 010SD 土層断面 (北東から)



1面 046SB (北から)



1面 116SE (北西から)



1面 手前が 117SD、奥が 116SE (北から)



1面 096SK 土層断面 (西から)



1面 079SK、109SK (西から)



1面 上が 057SY、下が 058SY (北から)



1面 058SY (南から)



2面 123NR 土層断面 (南から)



2面 123NR、124NR (北から)



轡の羽口 (123NR 出土)



2面 125SE (南から)



調査区全景